



金裕貞文学の翻訳VI : 「春・春」、「椿の花」

朴, 鍾祐
石塚, 由佳

(Citation)

海港都市研究, 19:49-62

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100488381>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488381>



金裕貞文学の翻訳VI
—「春・春」、「椿の花」¹¹¹—

朴鍾祐、石塚由佳
(PARK, Jong Woo) (ISHIZUKA, Yuka)

1. 作品について

本稿は「山里の旅人」、「チョムスニとカエル」(1933年)、「夕立ち」(1934年)、「ノダジ(富鉾脈)」、「金採る豆畑」、「餅」、「ならず者」、「釜」、「妻」(1935年)、「炎天」(1937年)に続いて、六度目となる金裕貞作品翻訳の試みである。今回紹介する「春・春」は1935年、「椿の花」は1936年に発表された作品である。「春・春」は金裕貞の特徴である郷土性と戯画性が最も具体化された作品の一つと評され、韓国の高校の国語教科書に掲載されている。「椿の花」もまた金裕貞の故郷の自然を背景に思春期の少年少女の愛情を諧謔的に描いた作品で、韓国の中学校の国語教科書の定番である。いずれも金裕貞作品を連想する時、真っ先に浮かぶ代表的作品である。

一作品目の「春・春」は月刊雑誌『朝光』(1935年12月号)に発表された。チョムスニの家に婿養子として入ったものの、チョムスニの背が大きくなならないという理不尽な理由で結婚させてもらえず、義父にただ働きさせられる愚直な主人公の話である。結婚相手のチョムスニにまで馬鹿呼ばわりされた主人公はしまいには堪忍袋の緒が切れ、義父と大喧嘩を繰り広げる。

二作品目の「椿の花」も『朝光』(1936年5月号)に掲載された作品である。主人公への恋心が受け入れられない腹いせに鬩鶏を使って嫌がらせをしてくるチョムスニと、彼女の恋心に気付かずやられてばかりの鈍感な主人公の物語である。ある時主人公はチョムスニの嫌がらせに我慢できずに、反撃に出る。

この二作品はいずれも結婚前の若い男女の話で、主人公に想いを寄せる「チョムスニ」という女の子が出てくる。チョムスニの家は小作管理人であり、主人公やその家族は頭が上がらない点で当時の家父長的な人間関係とは異なっている。愚鈍な主人公に対し、二人のチョムスニは意志の強いしつかり者の女の子として描かれる。金裕貞はわずか29歳というその短い生涯において結婚することはなかったものの、恋についてはいくつかの強烈なエピソードを残している。本稿ではこれらの作品の根底にある金裕貞の恋愛観について探ってみることとする。(写真左:「春・春」の挿絵) (写真中央・右:「椿の花」挿絵)



¹¹¹ 原題は「봄・봄」、「동백꽃」。

2 金裕貞の恋

1929年、徽文高等普通学校を卒業したばかりの21歳の金裕貞は、銭湯から出て来た姿を偶然見かけた4歳年上のパンソリ東便制¹¹²の名唱、朴祿珠(1904～1979)に一目ぼれする。「徹夜で手紙を書いて送ったかと思えば、血書を書いて渡しもし、プレゼントを送っては返され、訪ねて行って求愛したりもした。朴祿珠が出て来る酒屋の前で夜通し待っては、人力車に乗った彼女を引きずり下ろして殺すと脅したりもした¹¹³」というほど病的な裕貞の片想いは2年間続いた。この時何度も書き直した恋文、味わった孤独と恋しさは金裕貞が文学に目覚めるきっかけとなり、朴祿珠自身や彼女のパンソリは登場人物や題材として多数作品化された¹¹⁴。

1933年、朴祿珠への恋に破れ、失意の底にいた金裕貞を見かねて「山里の旅人」をはじめとする作品を次々と発表させたのは、友人の安懷南¹¹⁵であった。そして1935年には「夕立」で新春文芸1等に当選した金裕貞は、同年「春・春」を発表する¹¹⁶。

(写真：朴祿珠)



1936年、若き天才作家として文壇の寵児となった金裕貞は、その一方で数年前から患っていた肺結核が悪化し、壮絶な闘病生活を送っていた。忍び寄る死の影における彼は一筋の希望の光として自身の文学を理解し、ともに語り合える女性を求めている。そんなある日、雑誌『女性』(1936年5月号)の特集記事「どんな夫どんな婦人を迎えるか」で一緒に紹介された、会ったこともない朴鳳子(詩人朴龍喆の妹)という女性に恋に落ちる。31通もの恋文を書いたが返事はなく、しばらくして評論家の金煥泰と結婚したことを知ると、病状をさらに悪化させるほどの深い絶望に落ちたとされる¹¹⁷。‘返事の来ない手紙’や‘受け取り手のない手紙’という彼の失恋から生まれたであろうモチーフは、1936年の作品である「ヒキガエル(두꺼비)」や「人生の伴侶(생의伴侶)」にも描かれている¹¹⁸。

(写真：朴鳳子)



これらのエピソードから、金裕貞が芯の強い自立した女性に憧れを抱いていたことが推察される。その背景には幼くして亡くした母への恋しさや渴望を、歪曲した愛情表現として女性たちに向けるしかなかった金裕貞の孤独感があったのかもしれない。極端な女性への執着心と報われなかった恋は、結果的に彼の文学作品へと昇華されていた。本稿で紹介する「春・春」と「椿の花」でもチョムスニと主人公の想いは、通じ合うことなくちぐはぐに見える。

* 金裕貞文学に関しては韓国国内でも編集されたものが多数あるが、本稿では、金裕貞文学村村長を務める全商國編纂の『金裕貞 小説選集 山里の旅人¹¹⁹』を底本とした。

¹¹² 東便制：全羅道を南北に流れる蟾津江の東で伝承される伝統民俗芸能パンソリ。西便制とあわせて二大パンソリの流派を成す。

¹¹³ 全商國編『金裕貞 小説選集 山里の旅人』、ヨニョン M&B、2016年、p.304。

¹¹⁴ 柳仁順『金裕貞との同行—彼の生涯と文学、そして文化コンテンツの物語』、ソミョン出版、2014年、pp.44～45。

¹¹⁵ 安懷南(1909～?)：小説家、文学評論家、政治家。作家安国善の息子。

¹¹⁶ 柳仁順、前掲書、p.45。

¹¹⁷ 全商國編、前掲書、p.311～312。

¹¹⁸ 金裕貞学会編、『金裕貞の文学広場』、ソミョン出版、2016年、p.277。

¹¹⁹ 全商國編、前掲書、「春・春」pp.164～179、「椿の花」pp.206～215。

1. 作品翻訳

1) 「春・春(봄・봄)」

「お義父さん！ そろそろ俺…」

俺がこう頭を掻きながら、年頃になったから結婚させてくれないかと言うと、返事はいつも、

「この野郎、結婚だの何だのは、大きくなってからだー」と遮る。この大きくならないとってのは、俺じやなく、将来の俺の妻になるチョムスニの背のことだ。

俺がここに来て金一文も受け取らずに働くようになって、三年と丸七か月経った。それでもまだ足りないというんだから、この背はいつになったら大きくなるのか、まったくわからない。もっとしっかり働かなきゃとか、あるいはご飯を(たくさん食べすぎるといつも心配しているから)もっと少なく食べなきゃならないとか言うなら、俺だっていくらでも言いたいことはある。でもチョムスニがまだ幼いからもっと大きくなないとだめだというのには、どうすればいいかわからず、ただ面食らってしまう。

こんな調子だから、俺は最初から契約が間違ってたんだということがわかった。二年なら二年、三年なら三年、期限をきっちりと決めておけば良かったんだろう。むやみに娘が大きくなれば結婚させてやろうと、誰かがいつも見張っているのでもなく、その背がいつ伸びているのかわかるはずもない。そして俺は人の背がすくすく伸びるものとばかり思っていたが、背はそのまま横にばかり広がる体もあるなんて誰が知ろうか。時期が来ればお義父さんが間違いなかりょうと、無駄口もたたかずにぺこぺこしながら仕事ばかりしてきた。それならだ、お義父さんが自分で全部気付いて、

「おお、お前よくやった。そろそろ結婚しろ。」と、所帯でも持たせてくれりゃあ良いじゃないか。しらばくれるどころか、そんな話が出るかと、前もってとんでもないと言っては大騒ぎだ。肩書だけ婿で、働くのもまったくつまらない。

それも知らずにチョムスニの背が伸びるのを、ひたすらに待っていたではないか。

いつかはあまりにもうんざりして、物差しを持って飛びかかって、その背を一度測ってみようかと思ったが、俺たちはお義父さんが顔を合わせてはならないと言うので、向き合って話を交わすこともできない。井戸に通う道でいつも出くわす時は、かろうじて目分量で測って見はするのだが、その度に俺は少し離れたところから、

「ちくしょう、あの背ときたら！」と、^{あぜ}畔に唾をぺっと吐く。いくら大目に見ても、俺の脇(他の人より少し大きくはあるが)の下を越えるかどうかといったところだ。犬や豚はどんどん大きくなるのに、なぜこうも人は大きくならないのか、しばらく頭が痛くなるほど思案してもみた。ああ、水がめをしょっちゅう頭に載せてるから、骨が縮まったんだろう。と、俺が代わりにその水をこっそり汲んでやったりもした。それだけでなく、たきぎを取りに行けば村の神様¹²⁰に石を積み上げながら、

「チョムスニの背を高くしてくださいませ。そうすれば次は餅を持って来て差し上げますから。」と、祈ったことも一度や二度ではない。一体どんな背なのか、これでもびくともしないー

そうだ、昨日喧嘩したのだって、決してお義父さんが憎いからとかいうわけじゃない。

種をまきながら、つくづく考えてみるとまたつまらない。この稲が育ってチョムスニが食べて大きくなるならいいが、そうもならないのに植えてどうするんだ。毎年前にだらんと突き出てくるお義父さんの下腹(が食べ過ぎじゃなく、病気だと言ってるその腹)を膨れさせるために植えたくなてない。

¹²⁰ 村の神様:村の守護神を祀るために石を積み上げた所。

「ああ、腹が痛え！」

俺は種まきをやめ、腹をさすりながら畔に這い上がった。そして脇に抱えていた稲が入った箕をそのまま地面にどさりと放り投げ、俺もどっかりと座り込んだ。仕事がいくら忙しくても俺の腹が痛ければ仕方ないんだから、痛いのに誰が働くもんか。青々と生い茂る草を一掴みちぎって、脚の蛭を^{ひる}ごしごしこすりながら、お義父さんの顔を見た。

田んぼの真ん中でお義父さんも怪訝な目をして、しばらく俺をにらみつけると、

「この野郎、なんでまた休んでるんだ？」

「腹が痛いんです！」と、草の上にそれとなく倒れ込むと、お義父さんは痼癪を起した。自分も田んぼからばしゃばしゃと土手に上がって来ると、いきなり俺の胸ぐらを掴んで頬をぶん殴るじゃないか――

「こいつめ、仕事を放り出して、わしを困らせようって魂胆か。頭、かち割るぞ。」

うちのお義父さんは怒ると、こんなふう^{ひる}にひどく手癖が悪くなった。

それに婿にこの野郎、あの野郎という義父の野郎がどこにいるんだ。うちの村では誰かれ問わず、彼に叱られない者は長生きできないと言われている。小さな子どもまでも彼のことを影で悪口ピリ(本名がボンピリだから悪口ピリ)と後ろ指を指されるくらいすっかり評判が落ちていた。しかし本当に評判が落ちたとなれば、悪口より村のペ・チャンボンの家の小作管理人として一層落ちただろう。もともと小作管理人つてのは、しょっちゅう人を罵ったり殴ったり、そして顔つきもずんぐりした犬みたいじゃなきゃ使ってもらえないのだが、お義父さんは見かけがびったりだ。小作人が鶏の一羽もよこさないとか、田打ちの手伝いに来ないとか言う、その年の秋には間違いなくぼったりと土地を失うことになる。そうすると、あらかじめ金やら酒を貢ぐのに気を遣って走り回っていた奴がさっさと持って行くのだ。だからお義父さんの家の牛小屋には目玉のでっかい牡牛がおのずとのそりのそり入って来るし、村の人はその悪口を言いながらもぺこぺこするんじゃないか――

ただ俺には、お義父さんだって偉そうにするわけにはいかない。

後先考えずに頬一発殴っては、お義父さんはただただ呆然として後悔することになる。俺はその心中をよくわかっている。もう少しすると^{かしわ}柿も刈り取らなきゃならないし、田植えもしなきゃならないし、しばらく忙しい時期なのに俺が仕事をせずに家に帰っちまえばそれまでなんだから。昨年の今頃まで寝てると難癖をつけて来て、石ころを投げて寝てる人の足首をくじかせやがった。三四日ほどもうんうん苦しんでいると、しまいにはほとんど泣き顔になってるじゃねえか――

「おい、そろそろ起きて仕事しねえか。それで今年の秋に稲がよくできれば、お前の婚礼を挙げられるぞ。」

それにすっかりそそられてその日中に起き上がって、人が二日かかる田んぼを一人で耕しておいたから、お義父さんも目をまん丸くしていた。それなら本当に秋になったら結婚させてくれるのが当然じゃねえか。米俵をてきぱきと積んでも別段話はなく、水がめを頭に載せて入って来るチョムスニを^{がんくび}雁首¹²¹で指しながら、

「こいつがもっと大きくならなけりゃ。あれで結婚するなんてとんでもない！」と、人に恥をかかせておしまいだ。腹立ちまぎれに、くそ義父の野郎め、と石段に叩きつけて故郷に逃げ帰ろうかと思ったが、ぐっと我慢してしまった。

まったく、俺はこのごまで家には到底帰れない。婿入りに行つてそのまま追い出されて来るなんてどれほどだらしのないんだと、後ろ指を指されるのがおちだろうから――

畔からぱっと起き上がって、覇気のないお義父さんの前に近寄り、

「俺は帰ります。これまでの手当てをください。」

「お前、婿に来たんじゃねえか。作男になりに来たのか？」

¹²¹ 雁首:キセルの煙草を詰める部分。

「それならさっさと婚礼を挙げさせてくれなきゃ、一日中こき使われるばっかりで、やってやる、やってやるって—」

「だからわしがさせてやらないんじゃないかって、あれが大きくなるから。」と、しどろもどろにタバコばかりくわえながら、またいつもの話を並べ立てる。

こう問いただせば、いつも俺ばかり損しちまう。これでは駄目だ、とすぐに区長に談判に行こうと袖を引っ張った。

「ええい、この野郎、父親に向かって何しやがるんだ。」

行かないと踏みしめて怒鳴りつけるのは勝手だが、俺の身にもなってみろよ。やたらにこき使われて、娘はくれず、その上ぶん殴るなんてめっそうもない—

でも、俺だって本当はお義父さんが憎いってわけじゃない。

その前日俺がセ峠の向かいにある峰の焼き畑を一人で耕していた時のことだ。畑の端を歩き回るたびに変な花の匂いがぷんぷんと鼻をつき、頭の上で蜂たちがときどきブーンブーンと騒ぐ。岩のすき間から湧き水の音しか聞こえない谷間だから、晴れた空の春の日差しは布団の中のように暖かくてまるで夢を見ているようだ。俺は体がだるくて過労による病気(まだなったことはないが)になりかけているのか、胸がむかむかしていた。

「さあ！ へい、へい—」

こう歌いながら牛を呼ぶと、いつもなら肩をそびやかすところだが、なぜか畑半分も耕さないうちに、全身の力が抜けてしきりに腹ばかり立つ。訳もなく牛ばかりしきりに殴って—

「だめだ！ だめだ！ このくたばりぞこないめ(お義父さんの牛だから)足をへし折っちまうぞ。」

だけど俺は、本当はこいつのせいじゃなく、昼飯を頭に載せて来たチョムスニの背を見て癩癩を起したのだ。

チョムスニは、そうずば抜けてきれいな女とは言えない。そうかと言って餅のようにぶさいくかと言えばそんなこともなく、ちょうど俺の妻になるにふさわしい、まあまあの顔つきだ。俺より十歳年下だから今年十六歳だが、体は人より二歳育つのが遅い。他の娘たちはすらりと成長するもんだが、こいつは上下がすり減ったのが、俺の目にはまるで柿瓜¹²²のように見える。瓜の中では柿瓜が一番うまくてきれいだからだ。丸くて大きな目は優しそうで良く、ちょっとへたばって裂けたみたいだが、口はよく食いそうなのが良い。まったく飯さえたくさん食べさえすれば、最高に運が良いってことなんだから。ただ一つ欠点があるとすれば、時々(お義父さんはこれをみつともないと言うが)あんまり早く動き回ることだ。それで飯を運んでいる途中で不意に草むらで勢いよく落っことして、泥まみれの飯をたびたび食わされる。食わなかったらきまり悪い思いをするかと思ってこれをじっと嚙んでいると、がりがり音だけして石を食ってるのか、飯を食ってるのか—

でもこの日はなぜかまともな飯のまま、畝の端の方にきちんと下ろした。そしてまた顔を合わせちゃいけないから、少し離れてこちらに背を向けてしゃがみ込むと、器が空くのを待つ。

俺が食い終わって身を引いた時にやって来て器を片付けるんだが、ところが俺はびっくりしたじゃないか。がくんとうつむいてお盆に器を重ねながら俺に聞けというのか、独り言なのか、

「一日中働きゃなしで終わるつもりかしら」と一人でぶつぶつ言うのだ。顔を合わせちゃいけないのに何のつもりか、と俺は面食らった。一方で何か良い方法でもあるのかと思って、俺も空に向かって独り言で、

「そんならどうするんだよ？」と言うと、

「結婚させてくれって言えば良いじゃない。」

¹²² 柿瓜: 柿色のまくわ瓜。

と力強く言い放つと、顔が赤くなって山の方にそのまま逃げて行く。

俺はしばらくの間どうなったのか訳がわからず、その後ろ姿を黙々と見つめた。

春になるとあらゆる草木が水を吸って芽生える。人もおそらくそうなんだな、と数日の間にぐんと(中身が)大きくなったらしいチョムスニのことがたまらなく恋しくなった。

それなのにずうずうしくまだ幼いと言うんだから――

俺たちが区長さんを訪ねた時、区長さんはしおり戸の外にある豚小屋で餌をやっていた。ソウルにちょっと行って来てから、人は品がなくちゃならないと言って口ひげが一見屋根の上に座ったツバメの尾のようだ。両側につんと跳ねていて、それをえっへんとなでる癖がある。俺たちをきょんと見て、先に気付いたのか、

「仕事の途中でどうしたんだ？」と言うと、手を上げて素早くそのえっへんを一度した。

「区長さん！　うちのお義父さんと最初の契約では――」

先を越そうとするお義父さんを後ろに押しのけて、俺があわてて走り込もうとしたが、よく考えて、

「いえ、うちのお舅さんと最初に。」と、初めからまた言い直した。お義父さんはお舅さんと呼ばれるのが好きで、外でお義父さんと言うと余計に腹を立てる。蛇だって蛇と言われて嬉しいか、みっともないから人前では頼むからお舅さんと呼ぶように日ごろから言葉遣いに注意するように言われているのに、俺はそれもしょっちゅう忘れちゃう。その場でもお義父さんと言ってから、横で俺の足の甲をぎゅっと踏んで横目で見らみつけるのでようやく気付いたんだが――

区長さんも俺の話詳しく聞くと、ずいぶん気の毒な様子だった。そりゃ区長さんだけでなく誰だって皆そうだろう。長く伸ばしてある小指の爪で鼻をほじって、あちらにぴんとはじきながら、

「それなら旦那！　早く式を挙げてやりなさんな。あんなに結婚したがってるんだから。」と、俺の見込み通りに言った。しかし、この言葉にお義父さん指を鼻先に突き付け、目をむいて、

「結婚だの何だの、娘がもっと大きくなってからするもんじゃないか？」という、勢いがなくなり、口をくちやくちやさせるばかり――

「それもそうだな。」

「この四年間も大きくならなかったのに、いつになったら背が伸びるんです？　そんなら全部なかったことにして手当をください――」

「この野郎！　俺が大きくならないように言ったわけでもないのに、俺に大きな口叩くんじゃねえ！」

「お姑さんはスズメくらいの背なのに、どうやって子どもを産んだんです？」

(事実、お義母さんはチョムスニの耳一つ分ほど背が低い)

お義父さんはこれを聞いて、からからと笑うと(しかしどう見ても苦虫を噛み潰したような表情だ)、鼻をかむふりをして俺を密かに懲らしめようと肘で横腹をぶすつと突くのだ。汚い、俺もふくらはぎのハエを追いかむふりをして、腰をかがめながら肩でその尻をぐっと押しのけた。お義父さんは前につんのめってしおり戸の方へ転びそうになりながらも体を立て直すと、ひどくにらみつけた。この野郎め、と言いたそうだが、人前だから言えずに立ってるざまがいい気味だ。

しかしこのことには別段素晴らしい解決策は得られないまま、田んぼへ引き返して来て種をまいた。なぜならお義父さんが何か耳打ちしてひそひそ話した後だ、区長さんが俺のためにこっそりこう言ってくれたからだ。(ムンテの話では区長さんはお義父さんに田んぼ二反借りてるからそそのかされたんだと言うが、俺はそうは思わない)

「お前の話もよくわかる。もちろん年もいってるから、息子がほしいというのも当然だ。でも農作業が一番忙しい時に働かないとか、実家に帰るとか言う、損害罪で懲役になるんだぞ！(ここではと目が覚めた)最近サンボ村で山に火をつけたって懲役になっただろう。自分の山に火をつけても懲役になるご時世なのに、人の家の農作業を放り出したら罪がどれだけ重くなるか。それにお前は訴状を出しに(手当をもらうた

めに官庁に訴状を出しに行くと言った)行くって言うけど、そうすりゃいたずらに罪を重ねるようなもんだ。それに結婚もそうだろう。法律に成年っていうのは二十一になってようやく結婚できるとあるんだぞ。お前は息子ができるのが遅れるのを心配するのはもちろんのことだろうが、チョムスニに言わせればまだやっと十六じゃないか。だけどさっきお舅さんの話でも、今年の秋には他のことはともかく、式は挙げてくれると言うんだからありがたいことじゃないか。早く行って種をしまいまで蒔いて来い。無駄口叩かず早く行け。」

それで今朝まで反論もせずに来たんだ。

お義父さんと俺が喧嘩したのは、今考えてみれば全然予想外のことでない。お義父さんにしてみれば、この頃小作人らに威厳を示したくて、「金があれば両班¹²³だろうが、他に何かいるか。」と、わざと下腹をぼんと突き出し、偉そうにふんぞり返って歩いているのだ。俺ごときをぶん殴って、他人の土地で築き上げて来たせつかくの家門を台無しにするような人じゃない。それに俺に言わせれば、どうにかしてよく見せて早くチョムスニの婿にしてもらわねけりゃー

考えてみれば、結局昨晚ムンテの家に遊びに行ったのが良くなかった。昼に区長さんの前でお義父さんと俺が喧嘩したのをどうやって知ったのか、嫌味ばかり言ってくるじゃないか。

「殴られても、そのまま黙ってるのか？」

「それじゃあ、どうしろって言うんだよ？」

「この野郎、どうするだって？ ポンピリを苗床に逆さまにぶち込んでやれよ。」と、やたらに俺の代わりに拳を振り回して怒って、油皿まで殴りつける。あいつはもともと気性が荒っぽいんだが、自分がそうしておいて俺に油代を弁償しろと無茶を言ってくる。俺は呆れて黙って座っていると、自分だけ続けてしゃべるに――

「一日中働いてばかりいるつもりかよ。」

「ヨンドゥギは一年で婿入りしたのに、お前は四年経ってもまだだ。」

「お前が三人目の婿だって知ってるか、三番目の婿。」

「他人事にしたって腹が立つ。この野郎め、井戸にはまって死んじまえ。」

しまいには爪で喉を搔っ切ってしまえと、自分の息子に言うように考えもなしに激しくたたみかけた。ありとあらゆることを言ったので、そのまま言うことはできないが、かいつまんで言うところいうことだ――

うちのお義父さんには娘が三人いるんだが、長女は一昨年の秋に嫁に行った。実のところは嫁に行ったんじゃないくて、その娘も婿養子を決めておいて送り出した。でも娘が十の時から十九、つまり十年間も婿を入れ替えることを、村では婿成金だと有名だけど、十四人なんてあまりに多すぎる。お義父さんは息子がなく娘ばかりだから、その次の娘の婿取りをするまではこき使わないといけな。もちろん作男を雇えばいいんだが、それは金がかかるから良く働く奴を選ぶのに、次々変えて行った。また奴らの方でもひっきりなしに怒鳴られた上にひどくこき使われるから、腹が立って逃げ出したんだろう。チョムスニは次女だけど、俺が言わば三番目の婿として入って来たってわけだ。俺の次に四番目の奴が入って来るところを、俺がよく働くし、それにちょっと単純だからお義父さんはぎゅっつつかんで離さない。三女は今六歳、少なくとも十歳にならなくちゃ婿養子は取れないから、その間死ぬほどこき使われるだろう。だからこれからはひっくり返ってでもしっかりと結婚させてくれと言ひ張れと、こう言うんだ。

俺はうわの空でうんうんと聞き流していた。ムンテは田んぼを取り上げられてからは、お義父さんと見ればやたらに怒り出す。それもお義父さんがくれと言った時に、ムンテの家の冠(昔郡守様がかぶったというもののだが、脇にあちこちシミの食ったぞうきんみたいなやつ)を快くあげていたならそうはならなかっただろうに――

¹²³ 両班:高麗・李朝時代の特権階級。

だけど俺はムンテの奴の話を全ては真に受けなかった。真に受けていたなら、昨晚帰ってからお義父さんと喧嘩したろうから、無事にいられなかったはずだ。そうなれば娘にまで愛想をつかされたお義父さんは一人悪者になる。

実際俺はチョムスニが朝飯のお膳を持って来る時までは、今日はどれくらいご飯がよそわれてるかばかり考えていた。お膳にはテンジャンチゲ¹²⁴と醤油が小皿に一つ、粟飯一杯、そして飯よりもっと山盛りに盛られた山菜がどんぶり一杯だった。山菜はチョムスニがひまひまに採って来るから、どんぶり二杯でも四杯でも好きなだけ食べても良いが、飯はお義父さんが一杯しかやっってはならんというので駄目だ。でもチョムスニがそのお膳を俺の前に置きながら、独り言のように、

「区長さんとこに行って、ただ帰ってくるなんて!」と、一昨日山でのようにぶつぶつ不満をもらした。確かに俺がしっかり食い下がらなかったのは馬鹿だった。自分でも内心そう思った。俺もあっちの壁に向かって顔を背けながら独り言のように、

「駄目だっていうのを、じゃあどうしろっていうんだよ!」と言うと、

「ひげを引っ張ったらいいじゃない、馬鹿!」と、また顔を真っ赤にして怒りながらつんとすねて中に入ってしまうじゃないか。この時誰も見てる人がいなかったから良かったものの、もし見ていたなら俺の顔は母親を失くしたコウノトリのひなみたいに哀れだっただろう。

事実この時ほど悲しかったことがあったらどうか。他の人がいくらみっともないと言っても構わないけど、俺の妻になるチョムスニが馬鹿にするならまったく俺はどうすりゃいいんだ。飯を食った後、背負子を背負って仕事に行こうとしたけどまた放り出して、別棟の庭の石段の上に寝そべって、俺はいつそのこと死んだほうがましかと考えた。

俺が働かなければ、お義父さんは歳をとって働けないし、結局野良仕事はできなくなっちゃう。後ろ手を組んでげっぷしながら門の外へ出て来ると、俺を見て、

「こいつ! お前また何やってんだ?」

「食あたりしちゃって、ああ、腹が痛い……!」

「腹いっぱい食っておいて何が食あたりだ。人の家の農作業放り出したら、こんちくしょう、懲役行きだぞ!」

「行っても良いですよ、ああ腹が……!」

本当に俺は働かず懲役行きでも良いと思った。今後息子を産んでも、その横で馬鹿馬鹿と呼ばれるんだから、今日は何がなんでもけりをつけたかった。

お義父さんは起きろと言っても俺が起きないから目が殺気立って来て、あちらへ行ったかと思うと背負子棒を持って来た。そしてそれで俺の腰をまるで石を押し付けるようにぐっと押して、しきりに倒そうとする。飯をたっぷり食べてぱんぱんになった腹がその度にねじれそうになりながら、はらわたが引っ張られてひどく固くなった。それでも起きないので今度は腹を背負子棒で上からぐつぐつと突き、足で脇腹を蹴った。お義父さんはもともと意地が悪いからそうするけど、俺だって負けないように腹をくくった。痛いのをぎゅっと目をつぶって、面白い、やってみろと思っていたが、尻をぶん殴られた頃には、自分でも知らないうちにぱっと起き上がって、そのひげを引っ張ってやった。だけどそれは腹が立ったからじゃなくて、さっきから台所の裏の垣根の穴からチョムスニが俺たちの様子をこっそりのぞき見ていたからだ。そうでなくても一言もきつく言えない馬鹿だと言われてるのに、黙って殴られてるのを見たら本当に馬鹿だと思うじゃないか。またチョムスニも憎んでるお義父さんなんて、俺にとっちゃ何でもないんだから、むちゃくちゃに殴っても良いんだけど、事情を汲んでひげだけ引っ張って(願い通りになったんだから、この時チョムスニはすいぶん

¹²⁴ テンジャンチゲ:味噌汁。

喜んだだろう)あっちまでよく聞こえるように、

「これを焼いてやるぞ。」と叫んだ。

お義父さんはもっと怒り狂って、つかんだ背負子棒を俺の肩にそのまま振り下ろした。頭がくらっとした。再び頭を上げた時には、俺も全身に怒りが湧いた。この義父の野郎め、と目から火花を散らしながら、丘の下の畑にそのまま押し転がしてやった。しばらくしてからお義父さんがはあはあ言いながら、やってやろうじゃないかと這い上がって来るのをまた素早く押し転がした。

這い上がって来たら転がし、転がしたら這い上がりを四度ほど繰り返し、その度に、

「こき使うばかりでなんで結婚させてくれないんですか！」

俺は怒鳴った。だけどこの時、お義父さんが快く、よし、明日にでも二人の婚礼を挙げてやろうと言ったら俺だって面倒なことはやめたかもしれない。俺としてはこれなら殴ったわけじゃないから、後で舅を殴ったという汚名を着せられずに済むし、いくらやったって構わない。

一度はお義父さんがぜいぜいと這い上がって来ると、俺の股下を狙って一気につかんでぶら下がった。あつ、と叫んで俺はそのまま世界がぐるぐる回っているようで、

「お舅様！ お舅様！ お舅様！」

「この野郎！ 取って食ってみろ、食ってみろ！」

「ああ、ああ、お願いだから！ 助けてください、お願いだから！」と両腕をあたふたと振り回す頃には、額に脂汗がじつとりとにじみ出し、もはや本当に死ぬんだと思った。それでもお義父さんは放さなくて、俺がとうとう地面に倒れてほとんど気を失いそうになってから放す。汚い、汚い。これがお義父さんなのか。俺はしばらく起き上がれずにあわてふためいていた。そうして顔を上げて見ると(まったく何も見えなかった)、手足をぶるぶる震わせながら俺ものろのろと這って行って、お義父さんの股下をぎゅっとひったくった。

俺の頭が割れるほどぶん殴られたのはこのせいだ。でもここがまた、うちのお義父さんのとりわけ偉いところだ。他の人なら手当をやってでもすぐに追い出しただろう。怪我した頭をあぶった綿棒で手ずから消毒してやり、懷にタバコひと箱を入れてくれながら、

「今年の秋にはきっと婚礼を挙げさせてやる。つべこべ言わずに裏の豆畑でも早く耕して来い。」と、背中を押してくれるじゃないか。

俺はお義父さんがあんまり有難くて、いつの間にか涙まで出て来た。チョムスニを残してもう追い出されと思ったのに、思いがけない言葉を聞いて、

「お義父さん！ これからは二度とやりませんー」

こう誓って、大急ぎで背負子を背負って仕事場に行った。

でもこの時はそうとは知らずに、お義父さんを仇とばかり思って、思いっきり引っ張りまわした。

「ああ！ こいつ！ 放せ、放せ、放せー！」

お義父さんは手を振り回しながら、^{とろ}ろに気が付いた鶏のような声で叫んだ。放せだと、どうせならひどい目にあわせてやろう、と思って意地悪く引っ張った。でもお義父さんが地面に倒れて目に涙がじんとにじむのを見ると、ちょっと怖くなった。

「お願いだから！ 放してくれ、放して、放して、放して放して。」それでも駄目だから、

「おい、チョムスニ！ チョムスニ！」

この大声に、中にいたお義母さんとチョムスニが息せき切って一度に走り出て来た。

お義母さんは自分の夫だから肩を持つかもしれないと思った。でもチョムスニは俺の肩を持って内心いい気味だと思うだろうーどうしたわけか(今でも俺は訳がわからない)父親を懲らしめろと自分が言っておいて、今さら走って来て、

「まあ！ この人でなし、お父さんを殺す気なの！」と、俺の耳を後ろに引っつかんで、思いっきり泣くじゃないか。思わずここで気がくじかれて、俺は気が抜けた馬鹿のようになってしまった。お義母さんも飛びついて、もう一方の耳まで後ろに引ったくりながらまた泣くのだ。

こうどうすることもできないようにしておいて、お義父さんは背負子棒を持ってあたり構わず殴りつけた。だけど俺は避けようともせず、いくら考えてもわからないチョムスニの顔ばかりぼんやりと見つめていた。

「この野郎！ 父親の口からお願いだと言わせるまでやるのか？」



(写真左:「春・春」のモニュメント)



(写真右:金裕貞文学村¹²⁵の館長らとともに
「椿の花」の展示パネルの前で)

2) 「椿の花(동백꽃)」¹²⁶

今日もまたうちの雄鶏がひどくつつかれた。俺が昼食を食べて、山に薪^{たきぎ}を採りに行こうとして出た時だった。山に登ろうとすると、背中の後ろでバタバタと羽ばたく音が騒がしい。驚いて振り向いて見ると、案の定二羽が絡み合っている。

チョムスニの家の雄鶏(は頭がでかくてまるでタヌキのように頑丈そうな奴)が、体の小さいうちの雄鶏を容赦なくやっつけてしまうのだ。それもただやっつけるんじゃなく、バタバタと鶏冠^{とさか}をつついて後ろに下がると、しばらく間をおいて、またバタバタと首根っこをつついた。こうやって格好つけながら、さんざん痛めつける。するとこのみじめな奴はつかれるたびにくちばしで地面をつつきながら、コッコッと鳴くばかりだ。もちろんまだ傷が癒えもしない鶏冠をまたつつかれて、赤い鮮血がぽとぽと落ちる。

これをじっと見下ろしていると、俺の頭が割れて血が流れるように両目から火がかつと出るようだ。すぐに背負子棒を担いで飛びかかり、チョムスニの家の鶏に振り下ろそうかと思ったが、考え直してむちを空打ちするだけにしておいた。

今度もチョムスニが喧嘩をしかけたのだろう。俺をかんかん怒らせようとしたに違いないのだ。あの女め、最近になってなんで俺につっかかって、いがんでくるのかわからない。

四日前のじゃがいも事件をとってみても、俺はあいつにちっとも間違ったことはしていない。

あいつが山菜を掘りに行った時のことだ。人が垣根を編んでいるところを煩わしく邪魔してくるとは何ごとか。それも足音をひそめながら、背中の後ろへこっそりと来て、

¹²⁵ 江原道春川市にある「金裕貞文学村」では、金裕貞の生家をはじめとする多数の展示物があり、実際に小説の世界を味わえる。

¹²⁶ 椿の花:江原道では「(생강나무)」の花を「椿の花(동백꽃)」または「山椿(산동백)」と呼んできた。金裕貞の小説における「椿の花(동백꽃)」は我々がよく知る「椿の花」ではなく江原道の方言で、実際は黄色い花を咲かせる檀香梅の花を意味する。

「あら！ あんた一人で仕事してるの？」と、くだらないことで話しかけてくるのだ。

昨日までだってあいつと俺は話もろくにせず、互いに会っても知らん顔をし、こんなふうにおとなしく過ごして来たはずだが、今日になっていきなり馴れなれしく接して来るのはどうしたのか。

まして子馬ほど大きな娘が、働いてる男に向かって――

「そりゃ一人だよ。皆でなんてやるかよ。」

俺がこう吐き捨てるように言うと、

「あんた働くのが好きなの？」

さらに、

「真夏になってやってもいいのに。今から垣根つくるの？」

小言をあれこれと並べながら、人に聞かれないように手で口を塞いでは、その中できゅきゅと笑いこける。別にそれほどおかしいことでもないのに、暖かくなって来たので、この女、くるっちゃったんじゃないのかと疑った。その上、その少し後には自分の家の方をちらちらとうかがっていたかと思うと、前掛けの中に入れていた右手を出して、俺のあごの下にぐいっと突き出すのだ。いつ焼いたのか、まだ温かみがほかほか感じられる太いじゃがいも三つが手の平にいっぱい握られていた。

「あんたの家には、これないでしょ。」と、恩着せがましく大声で言っただけは、自分がやったことが知られると大変だから、ここで早く食べろと言う。そして続けて言うには、

「春のじゃがいもはおいしいんだって。」

「俺、じゃがいも食わないから、お前が食べろよ。」

俺は見向きもしないで、働いていた手でそのじゃがいもを肩の向こうへぐいっと押し戻してしまった。

すると、それでも帰る気配がないだけでなく、ふうふうと息をする音が尋常ではなく、だんだんと荒くなってくる。こりゃまたなんだと思って、その時ようやく振り返ってみて、俺は本当に驚いた。俺たちがこの村にやって来て、ほとんど三年目になるが、今まで浅黒いチョムスニの顔が、こんなにまでニンジンみたいに真っ赤になったことはなかった。その上、目は殺気立ち、しばらく俺をこんなふうにならみつけると、その後は涙まですにじんではじまないか。そしてかごをまた掴み取ると歯を食いしばってつんのめりそうに、ひっくり返りそうになりながらばたばたと畔の方へ走って行くのだ。

時たま、村の大人たちが

「早くお嫁に行かなきゃね。」と笑えば、

「心配しないでください。行く時になればちゃんと行きますから。」

こんなふうは何食わぬ顔で受け流すチョムスニだった。もともと恥ずかしがり屋の娘でもないが、悔しいと涙を見せる間抜けでもない。悔しければむしろ、俺の背と腰を籠で一度ぶん殴って逃げはしても。

ところがぶざまな格好を見せて帰ってからは、俺を見る度につっかかろうと躍起になるのだ。

仮にくれるじゃがいもを受け取らなかったのが失礼だと言うなら、ただくれればいいのに。「あんたの家には、これないでしょ。」とは何だ。そうでなくてもあいつの家は小作管理人で、俺の家はそこから小作の権利をもらって土地を耕しているから、日ごろからぺこぺこしている。俺たちがこの村に最初来た時、家がなくて困っていた時、あいつの家の敷地を借りて、その上に家を建てるように工面してくれたのもチョムスニの家の好意だった。そしてうちの母さん父さんも農作業する時、食糧がなくなるとチョムスニの家にせっせと行って借りて来て食べながら、あんなに親切な家族はないと唾が渴くほど褒めるのだ。そうして、十七にもなるのにひそひそとくっ付いてると、村でひどく噂されるから気を付けろと言ったのも母さんだった。なぜなら俺がチョムスニと何かやらかせばチョムスニが怒るだろうし、そうになると俺たちは土地も失い、家も追いついてしまうからであった。

涙を流して帰って行った翌日の夕方頃だった。薪をいっぱい背負って山を下りて来ると、どこからか鶏

の死にそんな鳴き声が響いている。こりゃ誰かの家で鶏を絞めているな、とチョムスニの家の垣根の裏に回って来る途中、俺は両目が真ん丸になった。チョムスニがあいつの家の土間に一人で腰かけて、チマの前でうちの雌鶏をしっかりと掴んで、

「この鶏ったら！ 死ね、死ね。」

こう執拗に殴っているのではないか。それも頭でもぶつんならともかく、完全に卵を産めないようにと、その尻にげんこつでこつんこつんと殴っているのだ。

俺は両目から火が噴き出るほど両手両足がわなわなと震えたが、四方を一度ぐりと見まわしてようやくチョムスニの家に誰もいないことがわかった。掴んだ^{かし}樫の木の背負子棒を手を持ち、垣根の真ん中あたりを打ち下ろしながら、

「この女め！ 人の家の鶏を卵産めないようにしようっていうのか？」と、ぎゃっと声を張り上げた。

しかしチョムスニは少しも驚いた素振りはなく、そのまま何事もないように座って自分の鶏にやるように、また死ね、死ねと殴っているのだ。これを見ると俺が山から降りて来る頃を見計らってあらかじめ鶏を捕まえておいて、見てみると言わんばかりに俺の前でぶん殴っているのに違いないのだ。

しかし俺はそうかといって人の家に飛び込んで、あいつと喧嘩することもできない立場で、かなり不利な状況であることがわかった。それで鶏が殴られるたびに、背負子棒で垣根でも叩きつけるくらいしか術がない。なぜなら垣根を叩けば叩くほど垣根の^{しげ}柴が落ちて骨組みだけが残るからだ。しかしいくら考えても、俺ばかりが損するわけだ。

「おい、この女！ 人の鶏、殺しちまうつもりか？」

俺が怒った目つきでまた怒鳴りつけると、ようやく垣根の方にとことこやって来て、垣根の外に立っている俺の頭をめがけて鶏を投げ捨てる。

「ああ、汚らしい！ 汚らしい！」

「汚いものをお前にこれまで持っつけて言ったか？ けしからん女め。」と、俺も汚らしい奴だといわんばかりに、垣根の方をぐりと回りながら、完全に頭に血がのぼっていた。というのは、雌鶏がひどい剣幕で俺の額に下痢便をびちゃっと垂らしたのを見ると、卵巣が裂けただけでなく、かなり症状が悪くなっているようだった。

そして俺の背後に向かって、俺にだけ聞こえるかどうかという声で、

「この馬鹿野郎！」

「ねえ！ あんた生まれつきおかしいんでしょ？」

それだけならまだしも、

「ねえ！ あんたの父さん、^{コジャ}鼓子¹²⁷なんでしょ？」

「なんだって？ うちの父ちゃんが鼓子だって？」と、言おうとして腹を立てて後ろを振り返って見ると、その時まで垣根の上にいるはずのチョムスニの頭がどこに行っただけか見えない。そうして戻って来てみると、垣根の外からまた悪口を浴びせているのだ。こんなに悪口を言われても一言も言い返せないと思うと、突き出した石につまづいて足の爪が裂けたのにも気づかないほど腹が立って、ついには両目に涙までじんと浮かぶ。

しかしチョムスニのいじわるはこれにとどまらなかった。

人がいなければひまひまに、自分の家の雄鶏を連れて来て、うちの雄鶏と戦わせる。チョムスニの家の雄鶏は陰悪な風貌で、喧嘩とあればいきり立つから当然勝つことは目に見えているからだ。だから決まってるうちの雄鶏が鶏冠や目が血まみれになるのだ。ある時はうちの雄鶏が出て来ないので、あいつがえさを持って

¹²⁷ 鼓子(コジャ):生殖器の不完全な男。

来て、誘い出して戦わせる。

こうなると俺も別の方法を準備するしかない。ある日はうちの雄鶏を捕まえて来てこっそり甕^{かめ}に向かった。闘鶏にコチュジャンを食べさせると、病気の牡牛がマムシを食べて元気になるように強くなるという。甕でコチュジャン一皿をすくって、鶏のくちばしの方へ押し入れ、食べさせてみた。

鶏もコチュジャンの味を覚えたのか、逆らうことなくほとんど半皿ほどもよく食べる。

そして食べてすぐには力がつかないだろうから、いくらか元気がみなぎるように小屋の中に入れておいた。

畑に肥料を置いて、荷物をかついで行って休むときに、その鶏を抱いて外に出た。ちょうど外には誰もおらず、チョムスニだけあちらの垣根の内側に古びた服を裂いているのか、あるいは綿^{わた}をはたいているのかうずくまって座り、仕事をしているだけだ。

俺はチョムスニの家の雄鶏が休耕畑に行つて鶏を下ろし、静かに様子をうかがった。二羽は相変わらず絡み合つて戦っているが、最初は何の甲斐もない。派手に突くせいでうちの鶏はまた血を流しながらも翼ばかりバタタツ、バタタツと羽ばたくだけで、まともに一度も突くことができない。

しかし一度はどうしたことか必死にびよんと飛ぶと、足の爪で目をひつかいて着地し、鶏冠をつついた。大きな鶏もこれには驚いたのか、ぎょっとして後ろへ後ずさりする。この機会に乗じて小さいうちの雄鶏はまたすばしこく飛びかかつて、また鶏冠を突いてからは、ようやく荒々しく険しいその頭からも血が流れずにはいられない。

よし、わかったぞ。コチュジャンさえ食べればいいんだな、と俺は内心やれやれと思った。その時は思いがけず俺が闘鶏を仕掛けているのに驚いて、垣根の外から見ながら立っていたチョムスニも、腹立たしいのか眉間にしわを寄せた。

俺は両手で尻を打ちながら、続けざまに

「いいぞ！ いいぞ！」と、頭の先まで嬉しさがこみ上げた。

しかしすぐさま俺は気が抜けて、棒のようにじっと突っ立っていることになった。なぜなら大きな鶏が一度突かれた仕返しに、荒々しく立て続けに突く剣幕に、うちの雄鶏は成す術がなく痛めつけられているからだ。これを見て今度はチョムスニがきやつきやつと笑い転げ、できるだけこちらに聞かせようと笑うのだ。

俺は見るに耐えず飛びかかり、うちの雄鶏を掴み取って再び家に戻つて来た。コチュジャンをもう少し食べさせたら良かったのに、急いで戦わせたことがひどく悔やまれた。甕の方に行つて、また口の先にコチュジャンを突き付けた。興奮からなのか、全く口に付けようとしな。俺は仕方なく鶏をまっすぐに寝かせて、その口に巻き煙草のパイプをくわえさせた。そしてコチュジャンを水で混ぜて、その穴に少しずつ注ぎ入れた。鶏は少し苦しいのかコッコツとくしゃみをするようだったが、この苦しさは毎日血を流すのとは比べ物にならないと思った。

しかし二皿ほどコチュジャンを溶いた水を飲ませてみたところで、俺はしょげてしまった。ぴんぴんしていた鶏がどうしたことか、首をぐにやりとひねって俺の手の中で固まってしまっているではないか。父さんが見るかと思って、素早く小屋に隠しておいたら、今朝になってようやく正気を取り戻したようだ。

そうしていたやつを帰つて来て見てみると、戦わせているので、あの女め、きつとうちに誰もいない隙に、あいつが入つて来て小屋から連れて行つたに違いない。

俺はまた鶏を掴んで入れておいて心配ではあったが、そうかといって山へ薪を取りに行かないわけにもいかなかった。

松の枯れ枝を取りながらじっくり考えてみると、どうやってもあいつの首をひねってしまいたい。今度帰つたらあいつの背中を一発ぶん殴つてやる、とさっさと薪をかついで大急ぎで下りて来た。

ほとんど家まで下りて来て、俺は草笛の音を聞いて足をぱたつと止めた。山のふもとに広がっている太い岩の隙間に黄色い椿の花がふつくと敷かれていた。その隙間に挟まって座り、チョムスニが哀れそうに草

笛を吹いているのだ。それよりもっと驚いたのはその前でまたパタタッ、パタタッと聞こえる鶏の羽ばたく音だ。きっとあいつが俺を怒らせようとまた鶏を取り出して、俺が下りて来る四つ角に喧嘩を仕掛けておいて、自分はその前に座って平然と草笛を吹いているのに違いなからう。

俺は腹が立って怒りを通り越して、両目から火とともに涙がぱつとあふれた。木の棒も置いておく間もなく、そのまま投げつけては背負子棒を伸ばしてあわてて飛びかかった。

近くに来て見ると案の定俺の思った通り、うちの雄鶏が血を流して、ほとんど瀕死の状態だった。鶏も鶏だが、それにも関わらずまばたき一つせずにそのまま座って草笛ばかり吹いているそのさまにもっと身震いがする。村でも噂になったが、俺も一時はてきぱきとよく働く可愛らしい女の子だと思ったが、今見るとその目はまるで子ギツネのようだ。

俺はただちに飛びかかって、自分でも知らないうちに大きな雄鶏を一発殴り倒した。鶏はぱたつと倒れたまま、脚一つ動かさないまま死んでしまった。そして俺は呆然と立っていたが、チョムスニが陰しい目つきで目を剥いて近づいて来るので、後ろにごろんとひっくり返った。

「こいつ！ あんたなんで人の鶏を殴り殺すのよ？」

「それが、どうしたんだ？」と、起き上がると、

「この野郎！ 誰の家の鶏よ？」と、胸ぐらを強く押すせいで、またごろんと転んだ。そうしてよく考えて見ると、腹立たしくもあり、決まり悪くもあり、また一方でことをしでかしたので、もう地に落ち、家も追い出されるかもしれない。

俺はよろよろと起き上がり、袖で目を覆ってはそのはずみで、わっと泣き出してしまった。するとチョムスニが前に近づいてきて、

「じゃあ、あんたこれからもうあんなことしない？」と、尋ねた時になってようやく生きる道を見つけたようだった。俺は涙をまず拭いて、何をしなければいいのか、よくわからなかったが、

「うん！」と、むやみに答えた。

「また今度そんなことしたら、私はもっとあんたのこといじめるからね！」

「うん、うん。もうしないよ。」

「鶏が死んだことは心配しないで。私、言い付けないから。」

そして何に押されたのか、俺の肩に手をついたままぱたつと倒れる。そのせいで俺の体も重なって倒れ、咲き乱れた黄色い椿の花の中にすっぽりと埋もれてしまった。

つーんとかぐわしいその香りに、俺は地面が抜けてしまうように、頭全体がぐらくらした。

「あんた、何も言わないで。」

「うん！」

少しして、すぐ下で、

「チョムスニ！ チョムスニ！ あの子ったら針仕事ほっぽり出してどこに行ったのかしら！」

と、どこかに出かけて来たらしい彼女のお母さんのひどい怒り声がした。

チョムスニがひどく怯えながら、花の下をこそこそと這って山下へ下りて行った後、俺は岩に沿ってのそのそと這いながら山の上に逃げ出すしかなかった。

朴 鍾祐 (神戸大学グローバル教育センター／人文学研究科)

石塚由佳 (韓国全南大学大学院)